
転生先は・・・。

多人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先は・・・。

【Nコード】

N2545X

【作者名】

多人

【あらすじ】

闘病生活から五年、不治の病を患い特効薬も見つかる事もなく生涯を終えたはずだったが、神様の手違いで本来の輪廻転生の環とは違う環に乗ってしまった。

果たして主人公は新たな転生先で生き残ることができるのか!?

モンハン リリナのA・S 今ここ

感想の制限をなしにしました。現在の更新頻度は約1週に1話ペー
ースの週末or週始め更新です。次回の投稿は12月3〜4日を予

定してます。（投稿日は前後する場合がありますがご了承ください）
大幅に遅れる場合は活動日誌で告知します。

原作名を「デジタルモンスター」に変更しました。後、PVが二万を突破しました！皆様、今後とも宜しくお願いします！！

プロローグ（前書き）

それではどうぞ

ブローグ

……ここは何処なのだろうか？

確か俺は病室で横になっていたはずなのだがどうしてここに？

「それは貴方が生を終えたからですよ」

生を終えた？ って事は……俺は死んだのか。
ってか、あんただれ？

そう思い声のする方に顔を向けると、
土下座している人と
笑顔だけど目が笑ってない人と
それら二人を呆れたように見ている人がいました。

……… って事は貴方のミスで俺は死んだの？

「いや、そ、そういう訳ではないのですが貴方の死後の輪廻転生先がもんだいなんです……… すいません………」

この慌てたり謝ったりする人が、自称神様「自称じゃないですっ！……… 自称神様のアリスさんです、役職は俺担当の神様でこの事件の原因にあります。」

「すいません、うちの部下が」

この人がアリスさんの上司であるイカウスさんです、役職は人間を中心とした現実世界軸を統轄する偉い神様です。

「まったく、あんたの所のお・か・げ・で！こっちまで怒られたじゃない！！」

このアリスさんを怒っている人がイカウスさんやアリスさんとは別

の部署のノームさんです、役職はゲーム・漫画、伝承など幻想や想像世界を統轄する偉い神様です。

このお三方の説明をよく聞いてみると以下の通りみたいです。

- ・僕は寿命を全うした。
- ・本来は人間世界の輪廻転生の環に入るはずだった

・アリスさんが人間世界の輪廻転生の環に組み込むはずだったのが間違えてノームさんが統轄する、幻想などの想像世界の輪廻転生の環に組み込んでしまった 今ここ

と、いう事らしい。

で、なにが問題な訳？

寧ろこちら前世は二十歳後半から三十にかけての五年間は闘病生活だったわけで、なにがあるかわからないが少なくとも前世よりは楽しいだろうに、なにがダメなの？

ノームさんが言うには、「本来ある世界軸にその世界軸にあるはずがない存在、この場合異物と呼称するんだけどこの異物が入ることによりA世界軸の矯正力が働き異物を排除する。これが普通なんだけど稀に、異物がその世界軸に根付きすぎると世界軸の矯正が働いた時点で異物ごと世界軸がなくなってしまうの。」

って事らしい。

で、なぜアリスさんがこんな間違いをしたかと言うと

アリスさんが言うには

「普通だったらそのまま輪廻転生の環に乗り、新たな人生を始めるんですけど鐘兎さんの第1世界軸での輪廻転生の環が終了したので、第2世界軸での輪廻転生の環に組み込むはずだったんですが、私が間違えてノームさんが管轄している世界の第2世界軸に組み込んでしまったんです……………」

「ごめんなさい……………」

って事らしい。

ということは、俺死ぬの？

いや、今死んでるけど人生やり直してもまた死んじゃうの？

って思ってたんだけど、いち早く気づいたイカウスさんがアシストして、ノームさんが管轄したIFの世界軸に組み込んだらしい。

じゃあ、何も問題ないじゃん。

早く行かせろしって言ったらイカウスさんがこの問題のなにが問題かを言ってくれました

「それがね、鐘兎さんには申し訳ないんだけど何処の世界軸に飛ぶかもわからないし、何になるかもわからないんだよ」

…え？

それは…………確かに問題よね。

それで一つ疑問なんだけど、そのIFの世界軸だとなんで俺が行ってもいいの？

「それはですね、このIFの世界軸はどの部署にも存在しているのですが、本来ある世界軸と基本的な事は一緒なのですが、本来の世界軸で起きたバグやイレギュラーなどの事象や存在をIF世界軸にオートで送り、本来の世界軸を維持しバグなどをIF世界に送ることとバグを、起こるべくして起きた事となった新たなIF世界軸として存在させる為の軸なのです」

つまり、エラーを無かったことにできないから、できないならいつそ別の世界を作って正史にするってことか。

で、アリスさんがやったミスが無かったことにはできなかったからIF世界軸に組み込んだわけか。

「ごめんなさい……………すいません……………」

それで俺はどうすればいいの？

「鐘兎さんには勿論転生して貰うんですが、こちらからの一つのお願いと一つのお詫びをしたいのですがよろしいでしょうか？」

まあ、構わないけどさ。でもイカウスさん内容によるよ、お願いに關しては。

「そうですね、先に内容をお話しましょう。

鐘兎さんにお願ひしたいのはIF世界軸の守護者みたいな事をやってもらいたいのです。

守護者と言っても我々神のような世界軸に直接手を下せるような立場ではなく、

傍観者として時々でいいのでIF世界軸を廻ってほしいのです。

もちろん、今回の転生先で満足に生活してからで構いません。」

まあ、そういうことならいいよ。

それで、お詫びって言うのは？

「はい、お詫びというのはですね、転生先が不明で転生する物か者がわからないので転生当初に生き残れる可能性が未知数ですから、

生き残れる為に鐘鬼さんが希望される願い事を一つ叶えます。記憶に関しては本来の輪廻転生とは違うので記憶を自覚したまま持ち越しとなります。

ちなみに、王の財宝や宝具類、ならびに神々に纏わる品などが欲しいとの要望は別の部署の神との交渉が必要となりますので申し訳ありませんが叶えることができません」

なるほど、世の中そんなに甘くないわけか。

んゝ……、じゃあさ

オメガモンX抗体の見た目から能力、身体能力ってのはどう？

「オメガモンX抗体ですか…… 良いでしょう。

ですが、デジモンの世界になるとは限らないのでそこはご了承ください」

それはわかってますよ。

「それならいいですよ。

それでは、色々な説明も終え転生に必要な事項も聞きましたからさっさとそく転生して貰いましょう。

それでは、良き転生ライフを」

その言葉を聞くと同時に

俺の意識は落ちた。

プロローグ（後書き）

今後も遊んで書きます。

第1話 じじやじよ。(前書き)

それではじつぞ。

第1話 ことごとくよ？

目覚めるとそこは、
視界を覆い尽くすほどの木々や草花に囲まれていた。

どうも、IF世界軸に転生した鐘兎です。
目覚めていきなり緑に囲まれていたのは驚きました。

まあ、それはいいんだけど……
なんか周りが大きく見えるんだけど、何これ？
それに、体がなんかおかしいんだけど。
体は黒いしなんかモフモフしてるし挙げ句、手が羽になってるを
だけど………

あれ……神様、オメガモンどこいったし
でも、あの話し方は嘘をついているようには見えなかったし、まだ
適合できてないだけか？

とりあえず現状の容姿確認のために水辺を探すべく森の中を突き進
む。

森の中を進む途中、
ねばねばした草や赤々と今にも燃えてしまいそうな草があったこと
を言っておこう。

しばらく奥に進んで行くと念願の水辺こと川を発見、そのまま川に向かって走り自分の顔を確認したんだが……

「キュ、キュイ？（りゅ、竜の顔？）」

そこには、人の顔ではなく竜のような顔つきの俺がいた。

というか俺まともに喋れてないし、それにこの姿どつかで見たことがある……なんだったかな……

……あ、この顔って確か前世で使っていた遊戯王のデッキに入れてた黒竜の雛じゃないか。

ってことは、ここは精霊界なのか

などと思っていたら

「ギャース！ギャース！」

なんて声が聞こえてきたから振り返ると……

ランポスさんがいらっしやいました。

あれ……、これいきなり死亡フラグなんじゃないか？

試しに炎を吐けるかやってみたけど「ポッ」としかでない。

……まずいますまずい！

この間にもラン波斯さんはじりじり迫ってくる。

畜生！こうなったらやってやるよ、どうせ死ぬなら華々しくな！！

ラン波斯に特攻をかけた始めたそのとき頭の中に浮かび上がる一つの言葉。

ゼヴオリューション

俺は頭の中に浮かんだ言葉を紡ぎながらラン波斯に突撃していった

結果だけ言うと、気づいた時にはオメガモンX抗体になっていて、グレイソードでランポスの頭を切断してました。

……………とりあえず助かったけど、元に戻るにはどうすればいいのだろうか？

とりあえず黒竜の雛を頭に浮かべてみる……………戻った。

そういえばおなかへったなあ。

でも目の前にあるのはランポスの死体しかない。

ジュル……………

ごちそうさまでした。

自分でも驚くくらいたくさん食べれて割と美味しかったんだが、この小さい体にランポス一頭はどうやって収まったんだろつかすっこ

謎だ。

それでもまあ、今後の方針はある程度決まったわけで、通常時はこの姿で行動して餌を確保するときにオメガモンXで行動する事にした。

そして、この世界はモンハンのIF世界ってのがわかった。

あれ…………俺、このままだったら狩られるんじゃないか？

追記：火薬草とニトロ茸マジうめえ！

第1話 ことごとくよ? (後書き)

ストックがなくなるまでは一日から二日間隔で上げるとおもいます

第2話 時は流れ……まあ要するに話を進めるためのキングダムソーン（前書き

すこしおそくなってしまいましたけどどうぞ

第2話 時は流れ……まあ要するに話を進めるためのキングクリームソン

どうもどうも、あれから三年の歳月を経て真紅眼の黒竜に進化した鐘兎です。

…え？前から飛びすぎだつて？

確かに飛びすぎかもしれませんが、やっていたこと言ったら

起きる ランポス or アプトノスを狩る 食べる 寝る

この一連の流れを一日三回三年繰り返してましたから、書くことも特になかったんです。

あ、でも進化の時は驚きました。

今まで体長が大きく変わることなく過ごしていたんですが、

「目が覚めると、そこには…幻想きry」

みたいな感じで、

目が覚めたら真紅眼の黒竜になってました。

ええ、驚きましたとも。でも進化した驚きの前にいきなり飛べたことが驚きです。

確かに黒竜の雛時代に飾り同然だった翼を動かして飛ぶ練習はしていましたが、まさか…この練習が実るとは思わなかった。

驚き事項その2、

私が生まれ育ったこの森なんですけど、

………飛び回って気づいたんですが、樹海でした。

そりゃ、雛時代に「ちよつとてか、かなり広すぎないか？」なんて思っておりましたが案の定でした。

驚き事項その3、

生態系が

「こんなの絶対おかしいよっ!!」
状態でした。

なにがおかしいって、

ランポスの量が半端じゃないくらい多いし、
なんか白いナルガクルガ居るし、

生えてる植物や茸類が大概爆発しそうか火に関係してるやつだし、
樹海の中に洞窟があるんだけど入ってすぐにマグマがあつて

奥にあるマグマのない陸地に飛んで進んで行くと氷結晶が壁一面に
埋め尽くされてる

氷室みたいところがあつてその中間が今の寢床なんだけど、そんな
おかしいな洞窟はあるし

(入る マグマ 陸地 奥に氷室)、

たまにヤマツカミが頭上を通過してくし、

ランポスの数よりもさらに多くのアプトノスが居るし、

極たまに竜人族と人間の方数名がやってくるし(多分古竜観測隊の方
々だとは思うけど)、

これに関しては偶々だけど樹海で脱皮するクシャルダオラを見かけ
たし、これも偶々なんだけど

オオナズチが定期的にこの樹海で水浴びしているし、

この樹海には湖があるんだけど、ただでさえでかいガノトスがよ
りでかくなって、鱗も鋼みたいな色して湖の主になってるし、

カブラスがランポスに負けてたし、

まだまだいろいろあるんだけど、
と・に・か・くこの樹海の生態系と、俺に優しくない強者のオンパ
レードは確実にフラグがたっているだろう。

驚き事項その4、
今までの食事の量が減った、一日三頭が一日一頭→二頭になりました。
た。

あれか？成長期はたくさん食べる事が仕事だったけど、進化したか
らエネルギーの使用効率が上がって食べる量が減ったのかな？
まあこれについてはわからんが少なくとも、食事の量が減ったのは
うれしい事だ。

とまあ、割とまだまだ驚く事はあるんだが目立ったものはこれぐら
いだ。

それで今の体の大きさなのだが、前世の知識で言うところのミラル
ーツぐらいはあるだろう。

ただ、これ以上大きくなるかはまだわからない。あと、真紅眼の黒
竜になってわかったことが一つある。

それは、狩りに向かないことである。

オメガモンXでの狩りはグレイソードが役に立つのだが、

真紅眼の黒竜の時は一撃が重くランポスがスプラッターな事になり、
黒炎弾を撃てばいくら加減しても最低出力でランポスが跡形も無く
なる。

どう考えてもハンターに見つかったら狩られる立場になることは確

実だ。

それはさておき、

折角真紅眼の黒竜になったので今日は少し遠出をしようと思い今回、雪山に来ております。

いやあー一回は来てみたかったですよね。

なんでもポポのお肉は大変美味らしく、まあアプトノスも美味しいんだけど、それを食べたいがゆえにここまできました。

まあ食べることが前提なんで今はオメガモンXですけどね。

現在ポポを食べている鐘兎です。
脂がのっついてマジうめえ！！

それに、口の中は元々高温だから焼きながら食べるっていう無駄な高等技術で食べてます。

にしても、こんなに旨いんだったら毎日「グルルルウ……」食べたい……な？つて、グルルル？

振り向くとそこにはお怒り状態のティガレックスさんがいらっしやいました。

追記：進化して何よりも一番驚いたのはマグマに浸かれた事です。

天然の温泉、マジ癒されるわぁゝ

第2話 時は流れ……まあ要するに話を進めるためのキングダムソーン（後書き

テリー様、感想というなの要望ありがとうございます。

多人です。

正直初めて感想が来たものですからテンションがホッピングしました。

何か要望などがあれば

感想の欄にお気軽に書きください。

それではまた。

第3話 ようするに世間は甘くない（前書き）

投稿予定日より一日遅れてしまいました。
すいません、それではどうぞ。

第3話 ようするに世間は甘くない

吹き荒れる雪の中、

端から見れば最悪の天候の中で

二頭の龍が己が信念の為に激戦を。

一つの龍は我が身の潔白の為に、

一つの龍は己が領域を蝕まんとする者を排除する為に、

今！ここに決着が着こうとしていた！！

どうも、ちょっとシリアス的始まり方にしてみました鐘兎です。

いやあ、このティガレックスマジ強いね

吹き飛ばしでは飛ばないし、

「行けレッドアイス！アイアンテールだ！！」

は避けられるか当たっても対してダメージはいかない。

ここは必殺技でしとめるしかない
あちらさんもどうやらそのつものようだ。

と、いうことで

「行くぞ！轟竜使い。」

俺はレッドアイズ・ブラックドラゴンで轟竜ティガレックスに攻撃！
食らえ、黒炎弾！！」

ドガアアアアン

さあて、これで一件落ちや「グルル」…っておいしいい！？

え？マジ？

よく見たらそこそのダメージには至ったみたいだけどまだぴんぴんしてるんだけどおおお！？こつなりやオメガモンXで……………

戦いは熾烈を窮めていた
交差する度に斬り合い

だが致命的な傷を与えることはできず、
逆に此方の披露とダメージは溜まる一方。

いくらオメガモンX抗体特有の固有能力「オメガインフォース」を
使い未来を先読みしても

今までの戦闘経験が明らかに足りなく
それに攻撃に加えられる威圧までは読めない。

このままでは埒が空かないのはわかっている。

敵の動きはすべて判っている

だが己に足りぬは経験と度胸だけだ。

今思えば、今までが温すぎたのだ。

己が力に頼りすぎ

戦う相手は弱者ばかり

これでは小山の大将ではないか。

そもそも、古竜種が時々でも訪れていたのだから一度でも剣を交えていれば良かったのだ。

それをしなかったのは、自らの力を過信し古竜種すらも圧倒できると思っていた驕慢の心があったからだ。

それがどうだ！

一步、生まれ故郷から出たらこの有様だ。

雪山の強者の縄張りに入り、

悪気がなかったにしろ

餌場を荒らしていたのは事実。

その結果がこの惨状だ。

だが、このティガレックスには感謝せねばならない。

己が驕慢な心に気づけたのはこの轟竜のおかげ

ならば、そのお返しに俺は今から生まれ変わり

おまえを倒すぞ轟竜っ！

「ハアアアアアア！」

この時、俺の中に

熱く滾る何かが現れ

それは俺に勝利の道しるべかと思わせるような事を紡がせる。

「我が力は聖、内に宿りしは黒炎、交わることの無き力が交わるとき
勝利への道は開かれる！我が身に宿りし黒竜よ具現しその力を示せ、
真紅眼の黒剣！（レッドアイズ・ブラックソード）」

元よりあったグレイソードは形を変え

真紅眼の黒剣に姿を変える。（レッドアイズの口から剣が生えてい
るようなイメージ）

今ならわかる。

この力の正しい使い道と

これから新たな人生の始まりが見える。

この轟竜には感謝している

だから、

「この一撃で決着を着けるっ！」

放つ技は

グレイソードから受け継がれし「オールデリートの力」

真紅眼の黒竜から受け継がれしすべてを燃やし尽くす黒炎の力

今、この二つ一つに！

「これで終わりだ！」

「全てを黒炎で包み無に帰せ」

「黒炎斬！」

そこにあるのは轟竜の亡骸。
この地に降りたった戦士は死闘の末、勝利をもぎ取った。

そして戦士は故郷に帰る

この戦いは戦士にとって忘れることがない戦いになるだろう……

第3話 よつするに世間は甘くない（後書き）

次回もよろしくお願いします。

第4話 僕の私の住む（前書き）

よろしくお願いします

第4話 僕の私の住む

俺に大切な事を教えてくれた

“彼”は

もういない

…でも、彼に会えて

彼と戦って

彼から学んだことを

俺は絶対忘れない。

俺を高見に導いてくれた彼のことを……………

前回の戦いを「あの日の戦いをふと思い出した剣士風」で表現してみた鐘兎です。

割とみんなにはどうでもいいかもしれないけど、モンハンの世界に入って名前が前世のままってどうよ？

…え？そんな事より話進めろって？

まあ落ち着けよ兄弟。

名前でモチベがかわったりしなかったりしたりするだろう？
って事を考えたので！！

突拍子もなく改名したベルですっ！

……………ええ、安直すぎるけど鐘兎の鐘をちよつと英訳しただけですけどいいじゃないですか！（作者はこの名前が好きなんです！）

…っは！俺はなにを……………、なんか怪電波を受信したような、まあいいか。

前回の戦闘から樹海の巣に帰ってきて休んでいます。
ですので、

今回は前回の敵の事と僕のすnder樹海のちゃんとした説明をした
と思います。

まず最初に前回のティガレックスさんなんですがどうやら原種では
なかったみたいです。

倒した彼の皮膚をよく見てみたらなんか鉱石ぽかったので

彼には申し訳ないけど腹を割いてみたら

ドラグライト・カブレライト・エルトライト・メランジェ・ライト
クリスタルが出るわ出るわの大バーゲン。

中には溶けかけもある。……彼、鉱石食べてるよね？

彼はグラビモスだったんだろうか？

とりあえず彼は特異個体種って分類にしとく。

次に僕の巣があるこの樹海の紹介。

この樹海、正式名はバテュバトム樹海である。

本来ならば昼はエスピナス 夜はナルガクルガが活動しギアノス以外の鳥竜種が生息している。

が、あいにくこの世界の樹海はそうじゃない。

昼間はランポスの大群と何故か気性が荒いアプトノスの戦闘、夜は月光に照らされた白銀のナルガクルガ特異個体種（推測）が闊歩する。

それに、今までこの樹海で確認された生物は

ランポス・アプトノス・ナルガクルガ特異個体種（推測）・ガノト
トス特異個体種（推測）・オオナズチ・クシャルダオラ

であるのだが、雪山から帰って来たときにアグモンらしきモンスター

ーを見かけたんだが間違いであって欲しい。

……… ついでにカブモンらしき奴もみてない、絶対見てない。

……… あと姿は見えないけどエアースョットって声なんか聞こえなかった、あれは幻聴だ。

……… 幻聴じゃないとまずいフラグが乱立してしまう。

……… つは！危ない危ないマジで危なかった。

一人でどこかに旅立つところだった。

で、とりあえずは当初の目的は話したんだけど
少し俺の事を話そう。

現状のレッドアイズとして使える攻撃手段は

- ・ 空中からの突撃
- ・ クロー
- ・ 吹き飛ばし
- ・ ふつうの火炎球
- ・ 火炎放射
- ・ 「レッドアイズ、アイアンテールだ！」
- ・ 黒炎弾

である。

原種や亜種程度などの攻撃も効くと予想されるが

希少種や古竜種には黒炎弾とアイアンテールでダメージが通ると予想する。

ただし特異個体種には黒炎弾でもダメージが通ってるか怪しく、その場合はオメガモン ver . X 抗体に生らなければ決定的なダメージは与えられないだろう。

次に

オメガモン ver . X 抗体

が使える攻撃手段は

- ・ダブルトレント
- ・グレイソード
- ・ガルルキャノン
- ・レッドアイズブラックソード
- ・黒炎斬

である。

ダブルトレントがあるものの、現状では戦闘に余裕があまりなく主にグレイソードを牽制にガルルキャノンを使用している。

ティガレックス特異個体種戦で真紅眼の黒剣を取得し黒炎斬で勝利を決めた。

ちなみに、グレイソードを維持したままガルルキャノンをレッドアイズ・ブラックキャノンにできることも戦闘終了後に判明した（ただし両方をレッドアイズモードにはできず必ず片方だけだった）。

さて、説明を始めると

どうしても語り口調になる俺だけどそこは許してね？

前世の癖なんだ。

あらかた話も済んだし、俺は一眠りするよ。

おやすみ

第4話 僕の私の住む（後書き）

次回は番外編か通常か迷ってます

第5話 え…またここ？（前書き）

割とギリギリですがまだ期日内です

第5話 え…またここ？

ふあゝ…………よく寝れた…

「あゝおはようございます」

ああおはようございます

……………おはようございます！？（。。（

「ええ！？なんで驚くんですか？」

そこには

自称神様（笑）アリスさんがいらっしやいました。

で、またなにか
アリスさんがやらかしたんですか？
そうなんでしょ？

ねえ、イカウスさん？

「え、ええ。平たく言えばそうですが、今回も若干特殊なんですよ」

話を聞くと、アリスさんはある作業をしていてまたミスをし、そのせいで僕はまた呼ばれたようだ。

そのミスと言うのが

「平行世界に置いての同位体の配置、組み込みのミス」らしいのだ。よく判らんかったので例を交えて説明してもらったんだが

例

・ I F 第1世界層に新たな存在 A（この場合は俺）が組み込まれた。
・ I F 第1世界層の中に存在 A の同位体を組み込まなければバランスがとれないので同位体を組み込み必要がある

補足：一つ世界層は24層から生っており区分分けは A ～ Z に生っている（例：I F 第1世界層・1 I A）

で、ここからが問題のミスについてなんだが

他のIF第2世界層…etcのIF世界層にも同位体を組み込まなきゃいけないわけで本来ならモブキャラや動物、最悪草木などに当てはめられる訳だが

…どうやら、主要キャラ又はその周辺人物に組み込まれたみたいで俺が行かないと最悪バットエンド一直線らしい。

「それで、大変申し訳ないんですが行ってもらえないですか？」

まあ、どうせ断れないんですしいいですよ。

「お詫びではありますが、ランダムですが能力を二つお付けしませう」

ランダムですか…
まあいいでしょう。
で、どこの世界に？

……もしかしてまた判ってない？

「まあ…そうなりますね」

わかりましたよ
では、行ってきます。

「いつてらっしゃいませ」「あ、あと死んでもモンハンの世界にいますので気軽にやってくださいね」

え、死ぬって……ちよつとあああああ………！………

はい、よく判ないけど別世界に移動してきたベルです。

とりあえず能力確認といきますかね

- ・ A G 細胞
- ・ 書き換える程度の能力

……うん、おれ東方の世界にきたの？

あと A G 細胞って能力を感じてみるとアルティメットガンダム細胞
なんだけど

これはどうなの？

細胞に関しては
どうやら自分には行使されず譲渡して初めて能力が発動するみたい
だ。

細胞効果は

「自己進化・自己再生・自己増殖」

でまあ存在が消えそう又は不安定な奴に渡せば便利そつだ。

次に書き換える程度の能力だけど

データを書き換えたり事象などを書き換えられるみたいだけど歴史
は無理みたいだ。

よし、試しにこの空間を書き換えて……ん？……こ
れって……いや、でも……ああ……ないわ……

その世界とは魔法が存在する世界
その名も

魔法少女リリカルなのはA・S

の世界でした

第5話 え…またここ？（後書き）

とりあえず番外編で収まらない気もしたので通常編としました。
次回は少し遅くなりそうです。

第6話 ご都合主義って便利だね？（前書き）

10 / 23

・ 夜天の諸 夜天の書に修正

・ 完成人格 管制人格に修正

・ 媒集 蒐集に変更

・ 少しばかりの加筆しました。話の流れは変わっておりません。

第6話 ご都合主義って便利だよね？

「……ここを変えてこれに移して、これを最適化。あ、またエラーか……えっとこの辺を修正して、これを追加して……」

あ、すいません。

あまりにもエラーや修正個所が多かったもので
ちよっと夢中になってました。

みなさんこんにちは！
ベルです。

前回、リリなのA・Sにやってきた訳ですが、
詳しい場所が判りました。

まあ、序盤ので気づく人は居るかもしれませんがまあ、闇の書でした。

………ええ、気づいた時は死亡フラグしかないと思いましたが、
でもそこはご都合主義の如く書き換える程度の能力で割と変更して
ます。

現状での変更点ですが

- ・闇の書の防衛プログラムの制御
- ・ヴォルケンリッターが行う蒐集への制限・効率化
- ・闇の書（夜天の書）からヴォルケンリッターの独立化
- ・ヴォルケンリッター独立化による維持プログラム
- ・ヴォルケンリッターへのAG細胞の付与
- ・闇の書と夜天の書を分けて維持
- ・闇の書のバグを修正、夜天の書のプログラムを応用して夜天の書内に闇の書を封印、これを蒐集完了と同時に解放
- ・闇の書解放後、主権限を夜天の書に移項
- ・闇の書に新規守護騎士プログラムを追加
- ・闇の書の新規守護騎士プログラムに新規蒐集機能を追加

とまあ、なるべく八神はやてさんに被害を出さぬように修正をしております。全身麻痺に関しては進行を遅らせてます。止めることも可能だけどそれをやると話が変わりそうだからこれはなし。

蒐集の制限・効率化ですが、ヴォルケンリッターが蒐集する際は魔導士を対象から外しこれを禁止する、尚やむ終えない場合は魔法術式のみを媒集する。

そのかわりに原生物からの蒐集を原則とする。

ってます。

効率化に関しては原作の原生物からの蒐集量の変換効率を向上させて従来の2・8倍してある。

あと紹介する点は

闇の書に追加した新規守護騎士ですが

まあ、俺です。名称で言うなら

・終焉を呼ぶ鐘 終焉の竜騎士 オメガX

って所でしよう。夜天の書解放前である立ち位置はヴォルケンリッターの上位に設定しました。

ちなみに、オメガXの蒐集行動は従来の物を使用してます。

ここで今回の大まかなプランを発表します！

1：ヴォルケンリッターは管理外世界の原生物から蒐集してもらいオメガX（こと俺）は海鳴市で主要キャラや魔導士から蒐集する

2：ヴォルケンリッターが本来被る罪（無差別な魔導士に対しての蒐集）をオメガXが被る

3：蒐集完了後、闇の書（この場合の扱いは原作上防衛プログラムとして）が夜天の書と完全に分離した際に闇の書を意図的に暴走するフリ

4：主要キャラによって闇の書（俺）を破壊。俺は晴れてモンハン世界に帰還。

…完璧だな。

確かに少し名残惜しいけど、これが原作を大体崩さずに進める方法だと思う。リーンフォース・アインに関しては媒集完了後に夜天の書分離にともないそのまま夜天の書の管制人格になる予定。もちろんAG細胞もつけて。あと、リーンフォース・アイン内に闇の書のバグが残るわけもないから消滅もなし。

ユニゾン機能は闇の書事件後でなくなる予定、だってツヴァイが出てこないかもしれないしさ。

そんなこんなで説明してるうちに6月4日、

そう

闇の書の起動日時になりました。

そういえば闇の書に着てからレッドアイズ・ダークネストラゴンになりました。

補足：夜天の書内に闇の書が寄生しているというイメージです。それゆえに闇の書と呼ばれている。

第6話 ご都合主義って便利だよね？（後書き）

投稿間隔が伸びた理由ですが、リアルが忙しくなってきたのもありますが、リリなの事態をまともに見たのが三期だけでし、最近二期の再放送がやっているので再放送とwikiの力を借りて書いてますので伸びました。ストックに関してはモンハンのはありますがリリなのは突発な為ありません。

番外編 ドジっ子神アリスさんへインタビュー（前書き）

単なる番外編ですので、本編は締め切りのとおりにあげます。

番外編 ドジっ子神アリスさんヘインタビュー

神様の朝は早い

今回取材させていただくのは新人であるアリスさん。

ここでアリスさんの簡単な紹介を。

人間界現実世界軸課に所属されている最近入られた新しい神様で
仕事態度は良く、作業効率も上々だとか。

ただ、ごくたまに天文学的な確率のミスを犯すのがたまにキズ。

それでは早速取材を開始したいと思います。

あ、アリスさんおはようございます。

「おはようございます!」

今回は天上界広報部の取材をお受けしてくださりありがとうございます。

早速ですが質問です

アリスさんは何故神様になられたのですか？

「えーっと、最初はずっと天使でもいいかなあって思ってた流れ作業の如くお仕事を頑張っていたらいつの間にか大天使ぐらいまで上がって

そこからまたなんとなく仕事を頑張ってたら、人間界現実世界軸の偉い神様から今の役職に就いてって呼ばれて今に至ります」

……アリスさんはエリートだったんですね。

「そうなんですか？」

ええ。

普通は天使から神様に昇格なんて、天上界に上がる前に余程の善行

を働いたか、神様と天使のハーフぐらいですから
とてもすごい事ですよ。

「へえ」

…………… それでは次の質問です。

アリスさんは時折、天文学的数字のミスをするとお聞きますが
何故そんなミスをしてしまうと思いますか？

「いやあ、イカウスさんにもよく聞かれるんですけど
いつもマニュアル通りに作業してますし、どこかとばしたりとか余
計な事したりとかしてないので自分でもよく分らないです^^」

それはとても不思議ですね。

一度マニュアル自体を見直さないといけませんね。

次の質問ですが、今まで一番大きなミスとありますか？

「確か世界軸そのものを止めそうに…………… いや、でも現実世界軸第1
層を消しそうになった事の方が…………… それよりも天上界の管理システ
ムを一時的にフリーズさせたっていうこれの方が…………… でもこの前
の同軸内での階層移動の失敗で他軸に移動させたこの件の方が……………
…………… ん、沢山あって分かんないですかね」

あのときのフリーズは貴方のミスだったんですね。

まあそれはさておき、
最後にこれからの意気込みをお願いします。

「ミスのない仕事を目指せるよう日々精進したいと思います！」

本日はどうもありがとうございました。

「ありがとうございました」

カタカタカタカタ……

「さあって今日も頑張るぞぉ！」

カタカタカタ……

「ここをこうしてこっちに移して……」

カタカタカタ、カチッ、カタカタカタ……

「ここをこうして……こうだっ！よし、これで完了っ」と

カタカタカタ、カチツ、カタ、カチカチツ、カチツ……………

「……………あ、あれ？」

カタカタカタ……………

「あれあれ？……………」

カタカタカタカタ……………

「もしかして……………」

カタカタカタ、カチカチツ、カタカタ……………

「……………」

・

・

・

・

ガタツ

「すいませ〜ん、イカウスさ〜ん！（。 。 ; ）」

ドジっ子新人神様の仕事はこれからも続く……………

f i n ?

番外編 ドジっ子神アリスさんヘインタビュー（後書き）

多少勢いで書いた感じはありますが、次回の本編をお楽しみに。

第7話 1人暮らしの家に予告もなく同居人が増えたら不審に思うよね。

(前書

今回から「side」を導入しました。

第7話 1人暮らしの家に予告もなく同居人が増えたら不審に思うよね

さてさて、闇の書も起動が始まり

夜天の守護騎士が具現化されている。

そろそろ闇の書の守護騎士の展開だろうなって思っていたら

「あなたは、誰ですか？何故この場所に私以外の者が存在しているんです？」

そこには、先程までプログラムしていて気づかなかったが

本来の闇の書改め、夜天の書管制人格、のちに祝福の風と呼ばれる
リーンフォースさんが居ました。

sideベル（闇の書）

やあ、みんな元気にしてたかな？
ベルお兄さんだよー！

・
・
・
・
・

冗談はさておき、
みなさんこんにちは
ベルです。

プログラミングをされていて気づかなかったんですが、アインさんの
存在を忘れてました。

それで「だから貴方は誰だ？」と聞いている」

はあ……………

「夜天の、私が誰で在ろうと貴殿には関係なかろう？」

「関係はあります。ここは、やて…闇の書の中で私は“元”ですが
管制人格です。」

この空間に守護騎士でもないのに存在はできないはずです。」

「夜天の。」

貴殿は“元”ではないぞ？」

「それはどういう事ですか？」

「貴殿は今でも、夜天の書の管制人格だ。」

そして我は……

闇の書の……管制人格”だ。”

「……！」

「そんなことありえぬ、つといた反応だな。」

だが事実なのだから仕方なからう。

不安なら確認を取ってみるがいい。」

「………！」

た、確かにそのようですね。

ですがどうして？」

「夜天の、答えは簡単だよ。」

それは……私が闇の書と呼ばれる由縁である防衛プログラムなのだから」

「！」

「確かに驚くのも無理はなからう。」

正しくはバグから生まれたのが我だ。

だが、そのままでは我は不安定な存在だった。

故に、夜天の書の内部に夜天の書を基盤とした闇の書のプログラムを作り防衛プログラムのバグごと闇の書に移し夜天の書に内包し、

蒐集完了と同時に夜天の書から排出するプログラムを組んだまでだ。その際に内包処理を施す過程でその維持を必要とした為貴殿を管制人格とした。」

「だから、私が今は管制人格という訳か。

……待て闇の、守護騎士プログラムが書き換えられているがどういう事だ？

それに何故蒐集完了時に闇の書は排出される必要がある？」

「夜天の、その質問についてだが

守護騎士に関しては蒐集の制限をかけたただけだ。魔導師への蒐集禁止と

万が一魔導師への蒐集行為を強いられた置いて、魔力特性と魔術式のみを蒐集するとしただけだ。

次に排出についてだが、

我は今世で生まれた闇の書の管制人格だ。

だが、所詮は“闇”

それは悪意や憎悪、悲哀や怒りから成り立ちすべての負が収束するのが

“闇”だ。

そしてこの今世の代まで闇の書の“闇”は深まるばかり。

そして“闇”は

いつか“光”に消される運命。

故に我は、夜天の書の

“闇”を全て引継、

今世でこの“闇”を消す。

その為の排出だ。」

「それでは貴方がっ！」

「……良いのだよ、夜天の。

今世の主人はとても素晴らしい

故に、その主人に“闇”など背負わせたくない

それに、蒐集が終わればまた暴走する。

そんな事、今世の主人にあつてはならない。

故に、我がその役を受け止める。

我が全ての“闇”を引き連れていく。

それが今世に意志を受けた我の使命であらう。」

「そんな事は……ありません！」

何故そのような事ができるのですか！？

何故貴方だけで片づけようとするのですか！？」

「夜天の……、そんな悲しい顔をするな……。

それに答えは一つなのだよ。

今世の代まで貴殿達は終わらぬ負の連鎖を紡いできた。

その連鎖はとてつもなく苦しいものであつたであらう。

そしてその苦しみを今世の主人に背負わせるのか？

答えは否だ。

そして、私にはそれを変える“力”があつた。

今世の主人を、今世まで負の連鎖を紡いできた貴殿達を“闇”から

解放できる方法が

たまたまあり、それが

我を消すことにより

“闇”が消えるのなら

この方法を迷わず使っただけの事」

「それでも…それでも！貴方は本当にそれでよいのですか！？」

「良くは……ないさ。

それでもこの方法しかないのなら、

“1”を捨てて“9”が助かるならそれでいい。

…それに、歯車はもう動き出した……。」

闇の書が起動を始め八神家には守護騎士達が具現化を終えていた。
本来であるならばここで終わりなのだが……

闇の書からある者が具現化された。

「我、闇に仕えし終焉を喚ぶ者なり。

終焉を喚ぶ鐘 終焉の竜騎士 オメガX、

闇の主の為、我が身を賭けてお守りいたしましょう」

その者を見て、守護騎士達は驚きを隠せなかった。

なぜなら、その守護騎士を見るのが初めてだからだった……

おまけ

・もしも主人公が空気を読まなかったら

闇の書が起動を始め八神家には守護騎士達が具現化を終えていた。
本来であるならばここで終わりなのだが……

闇の書からある者が具現化された。

「俺、参上……！！！！！！！！」

「……え……」

出落ちしたこの者が新たな守護騎士であった。

第7話 1人暮らしの家に予告もなく同居人が増えたら不審に思うよね。

（後書

とりあえず、リリなの編のヒロインはリインフォース・アインを
予定しています。

うまく書けるかは分かりませんがね。
次回をお楽しみに。

第8話 仲良しグループに新しい人が参加したら最初はぎこちないよね（前書き）

遅れてしまつてすみません。

八神家の口調が上手くいかなくて遅れてしまいました。

第8話 仲良しグループに新しい人が参加したら最初はぎこちないよね

6月4日午前0時、全ての歯車が動き出した。

side はやて

私がベツトで本を読んどったら、急に横の方から紫の光が射し込んできて、なにごとか？と光が射し込んできている方を向いたら、まあ〜おどろいたわ。

だって、本が浮かんどるんやもん。

しかも、その本には鍵が付いてるんやけど鍵がなくて今まで開かんかったん、でもその本が開いて中から紙がこう「バラバラバラ」ってな感じで飛び出して来おって、

それが収まったかと思うと、

そこにはその本を持った大人の女性2人と、小さい子供が1人と、犬？が1匹居ったんや。

んで、もうこれで終わりなんかな〜って思っているとまたピカ〜って光ってなんか剣と大砲？みたいなのをつけた白い人？みたいなのが現れたんや。

正直よくわからんけど、この人たちが家族になってくれたらうれしいなあ〜っと思っただわ。

s i d e シグナム

我々は驚いていた。

本来であるならば闇の書に存在している守護騎士は4人のはず。
だが目の前には5人目の守護騎士、しかも我等
ヴォルケンリッターとは違う、独立した騎士のようだ。
一体今回の闇の書はなにが起こっているというのだ………

s i d e オメガX

どうやら組み込んだシステムは上手くいったようだ、まあ微調整は
闇の書の俺がやるだろう。
俺は俺の使命を果たすだけだ。

っと、守護騎士達が疑いだしたしそろそろ行動に移すか。

「何を驚いているのだ？ヴォルケンリッターよ。」

「一つ聞く、貴様は本当に守護騎士か？」

「何を血迷った事を聞く？ 剣の騎士シグナムよ。我等守護騎士は主の為に存在する、それに我が守護騎士でないならば闇の書とのつながりも無いはずだ。

それが分からん訳ではなからう？」

「……………」

「そんな事どうでもいいんだよっ！！」

なんで今の今まで出てこなかったんだよ！？」

どう考えてもおかしいだろ！！」

「鉄槌の騎士ヴィータ、そう喚くではない。

そもそもお前は闇の書を何処まで理解してるんだ？ 何を知っている？ 闇の書がどういった理由で存在している？ 我等の存在理由は本当に守護する事なのか？」

なあ鉄槌の、これらに答えられるというのか？」

「お、お前は答えられるのかよっ！？」

「知っているから問うているのだよ。

その口振りだと分からない用だな、

だが教えて貰おうなどと思うなよ？」

聞くのは簡単だ、だが真に理解するには自ら考えねばその意味を理解することができぬぞ？」

それよりも、主はやてが眠そうにして居られる。では主はやて、詳しい事を聞きたいのは理解しておりますがもう夜も遅いので、御眠

りください
。」

「分かったわ。」

ほな、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、オメガ、おやすみ」

「「「「「お休みなさいませ主はやて」「」「」」」」」

side オメガX

「さて、色々聞かれる前にまず話をすべて聞いて貰おう。
最初に、我が守護騎士で在ることは確かだ。
次に、ヴォルケンリッターが行う蒐集に制限がかかった。
次に、守護騎士単体での独立が可能になった。
まあ話といってもこれぐらいだ。
何か質問は？」

「……蒐集の制限とはなんだ？」

「盾の守護獣ザフィーラ、順応が早くて助かる。制限というのは魔導師からの蒐集を原則禁止とし基本的には人外からの蒐集とする事。なお、魔導師からの蒐集をせざる終えない場合は魔導術式のみを蒐集する事になる。

これぐらいだ、効率は上がっているから蒐集に支障はないだろう」

「はいはい

守護騎士単体での独立ってなんですかあ？」

「湖の騎士シヤマル、

少しは疑うべきではないか？

……まあいい。

我等守護騎士は闇の書に付属しているプログラムに過ぎない、それを独立化させることによって守護騎士独自の進化を遂げ、仮に闇の書が無くなったとしても守護騎士が消えることはない」

「それはつまり、鍛錬を積みめばその分だけ成長しその逆も然りというわけか？」

「そうだ、剣の騎士シグナム。
つまりは、構成元はプログラムだが人間の様な存在になると考えて良い」

「それってつまりは…
はやてと一緒に居られるのか？」

「そうだ、鉄槌の騎士ヴィータ。
闇の書が在ろうと無かろうと主はやてと一緒にいれる。
ただ、蒐集をしなければ主はやては死ぬ。

その為にも明日から管理外世界に行って蒐集をせねばならん。」

「死ぬとはどういう事だ？」

「剣の騎士シグナム、そう凄むな。
簡単に言えば主はやては闇の書に蝕まれている。だが、666ペー
ジ全てを蒐集し終えれば解放され闇の書は独立する、そして主はや
ても助かる

…さて、夜も遅い。
いくら我々が魔力生命体だとしても睡眠は必要だ、結界を張り次第
寝る事しよう」

その後守護騎士たちは、眠りについた。

守護騎士達が寝静まった頃

「…それで終焉の竜騎士、お前はどのような存在なんだ？」

「なんだ、気づいて居たのか盾の守護獣ザフィーラ」

「…ザフィーラで構わない。」

「なら私の事もオメガと呼んでくれ。」

それで、ザフィーラよ。私の存在だが、私は闇なのだ。

闇の書が闇の書と呼ばれる由縁を背負い、今世で全てを清算する為の存在だ。」

「…オメガよ、お前まさか……」

「そこから先の言葉は必要ない

私は、主はやたとヴォルケンリッターの幸せの為に在るのだから」

「…ならオメガよ、やはり蒐集も」

「予想道理だ、と言っておこう」

「……お前は本当にそれでいいのか？」

「良くはないだろうさ。だが、曲がり形にも我々は“家族”なのだ。今世にできた“家族”を救えるならそれも致し方ない。

私は悪役に徹すればそれで済むだけの事だ」

「……」

「そう悲しい顔をするな、ザフィーラ。

私は本来生まれることの無かった身、

だから生まれたからこそお前達と主を救いたいのだ。

わかってくれとは言わない、だが皆には黙っていて貰いたい」

「…わかった。

この盾の守護獣、秘密は守る。」

「つらい役割かもしれないが、ありがとう」

そこに居たのは

月光に照らされた

1匹の守護獣と

1人の竜騎士が

佇んでいた

第8話 仲良しグループに新しい人が参加したら最初はぎこちないよね（後書き）

ではまた次回。

第9話 勉強って興味がある事以外ってつまんないよね（前書き）

まだ先だけど、次は何編にしようか迷ってます。何か希望等あれば感想欄に意見をください。

第9話 勉強って興味がある事以外ってつままないよね

side ベル（闇の書）

外の俺は割と大変そうだけど意識共有は常にしてるから俺も大変だ。どうもベルです。

今は闇の書で外の俺に擬人化機能を付けるべくプログラムを組んでいます。

でその傍ら、俺は「ここはどういう事だ？」「はいはい、ここはね……」

ちよつと割り込まれたけど、アインに一般常識とかを教えています。だって長いこと闇の書中に居るからそういうの必要かなって思ったら案の定でした。

正史では消滅してしまうが生憎とここは平行世界、生存フラグを建てたのではやての私生活でのサポ―「ここは！ここはあつてるか！？」

「わかった、わかったから落ち着いてくれ」

ま、また割り込まれたがアインさん普段はクールだけど勉強してるときはなんか楽しそうでなんか子供っぽい。
なによりも

「…ん、よし今日は満点だな」

「ほ、ほんとうか？」

「そんなに嘘ついてどうする？」

「やったぞ！私やったぞ！これで主のサポートに一步近づいたというものだ」

「まあとりあえず知識だけな、次は実践だ。

……んで、あれはやるのか？」

「…？何を言っている、やるに決まっているだろう？」

「そ、そうか。なら失礼して」

ナデナデ

「…んっ…／／」

そう、常識範囲とかそのた諸々の合格テストで満点を取ったら褒美に撫でるといふ割とおかしな事になっているのだが事の発端は……

～回想開始～

「そっぴやアイン」

「なんだベル」

「お前、これ分かるか？」

「バカにするなよ？これぐらいすぐに解いてやるっ」

10分経過…

「おい、まだか？」

「ま、まだだ！」

30分経過…

「……なあ、分かんないなら素直に言って良いんだぞ？」

「……うるさい、分かるったら分かるんだ」

1時間経過……

「……もういいから今書いてあるのを渡しなさい」

「……………うん」

結果発表

「……………見事に0店だな」

「う、うるさい！そんなものなど役立たん！」

「主の私生活面でのサポートに役立つぞ？」

「そんなことデータで覚えればいいんだ」

「知識だけなら誰だって覚えようと思えばできるが、いざ実践していきなりできる人は限られる。つまりはそういう事だ」

「そ、そうかもしれないが、
なら勉強などしなくてもよいではないか！？」

「夜天の、お前は褒美がないと勉強できない質か？
純粋な知識の探求という事をせんのか？」

「そんなこと私には必要とは思わんからな。
それと夜天の、という呼び方はやめろ。

…………… なんか余所余所しいではないか」

って、言われてもなあ。今リインフォースって名付けるとはやての時に違和感が発生するかもしれんから……、あ、あれでいいか。

「なら呼び名はアインでいいか？」

「…アイン…アインか！よしそれでいいぞ」

「…んでだ、褒美だけどこんなんでもいいか？」

ナデナデ

「なっ、何をする！／／」

「だめか？」

ナデナデ

「……嫌じゃ……ない／／」

「ならこれでいいの……か？」

く回想終了く

どうしてこうなった？

俺にはナデポのスキルなんて無かったはずだが、本当にどうしてこうなった？

大事なことなので二回言った、あとアインのキャラが崩れてない？確かに普段はクールだよ？

でも勉強の時は崩れる、俺なにか変なプログラムでも入れたらどうか？

でもまあいいか、

こんな楽しい日が続くならさ。

アインにはこの状態を楽しむのに、

今までの罪を気にしないで、

楽しむ事に資格なんていらないう事を理解してもらって。

それがこの中での俺の仕事。

だから、別れるその日まで仕事を済ますだけだ。

……でも、やっぱり消えたくないな。
いくら神様のミスで

一時的にここに居るとしても、
誰かが罪を背負って

消える方法しか無いとしても、
やっぱり……

消えたくない。

でも、それはいけないんだ。

確かに罪を背負わなければ消えることもない。

だけど、闇の書の“闇”は深く重い。

それを幼き少女に

強いるのはあまりにも酷であり、

少女にその意志はない、あるのは優しき心。

それに守護騎士達にも罪はない。

悪いのはプログラムした人間だ、
人の罪は人が背おらねばならない。
それに俺は一度死んでいる身、
まだ生を終えてない者に負わせるのも酷な話。

だから、俺は………

第9話 勉強って興味がある事以外ってつまんないよね（後書き）

次回をお楽しみに

第10話 悪い事だとしてもやらなくちゃいけない時ってあるよね（前書き）

みなさん、今回は更新が遅れて申し訳ありませんでした。

次回の更新も少し遅れる可能性がありますので、気長に待っていてもらえるとうれしいです。

今回からデバイスと念話の描写が出始めましたので

・デバイス『』

・念話

【

としました。

それではどうぞ。

第10話 悪い事だとしてもやらなくちゃいけない時ってあるよね

sideオメガX

みなさんこんにちは、

外で活動しているオメガです。

開始早々原作ブレイクをした訳なんですが、

守護騎士達には二人一組して管理外世界に蒐集させに行かせてます。

まあこのままでは管理局に気づかれるのも時間の問題ですので、

そろそろ第1話への介入を始めますか。

「主よ、我は少し外に出てきます」

「こんな夜におでかけかあ？」

「今宵の月を眺めながら散歩をしたくなりまして」

「まあええわ。もうすぐ夕飯ができるから早めに帰ってくるんよ？」

「承知しております、

それでは行って参ります」

「いつてらっしゃい、
気を付けてなあゝ」

【ザフィーラ、主を頼むぞ】

【…承知】

んじゃ、多少の罪悪感はあるが主人公の魔力を蒐集しに行きますか。
ちなみに、言ってなかったけど今は擬人化フォームになってます。
見た目は白髪ショートカットで目は薄目、慎重はそこそ高いです。

……なんか中二病によくある見た目な気がするがそこは気にしない。

「さて、確かアニメだとこのあたりでヴィータがこっぴやって……」

“封鎖結界”

「……つとこんな感じで、張ってたよな。
お、さっそく引つかかった。」

それでは移動はめんどくさいので転移でもしますか。

sideなのは

私が家で勉強をしていちら

『警告、魔力反応です』

「あ、結界！」

レイジングハートから魔力があつた所に向う為に変身しようとする人気がないビルの屋上に着いたらいきなり、目の前に人が現れたの。

「…あなたは誰？この結界を張つたのはあなたなの？」

「それに答える義理はない、貴様名は？」

「え、あ、あの、高町なのはつていいいます」

「では、高町なのは。」

我はオメガX、貴様の魔力を貰い受けるためにここに来た。
さあデバイスを構えろ！我と戦え」

「なんで戦わないといけないの！？ねえ理由を教えてよ！！」

「諄い、ならば行動で示すのみだ」

“マトリックスレボリューション”

そうオメガさんが言うとおメガさんの体にはバリアジャケットみたいな白い装甲を身にまとった姿になったの。

side out

オメガXは変身を終え
なのはに向き合うと

「行くぞ、高町なのは！」

そう叫ぶと同時になのはにつっこみグレイソードを切りつける。

「クツ、早い！プロテクション」

『プロテクション』

が、グレイソードはシールドに阻まれてしまう。

「ねえ！どうしてこんなことするの？私に話してよ！？」

「だから諄いと言っているだろう！」

「きゃああああ」

オメガXが力を込めるとシールドは壊れ、なのはは飛ばされた。

もくもくと立ちこめる煙の中オメガXは上空で佇んでいた。

「高いのは魔力だけということか、
拍子抜けだな。

さて早々に切り上げ……………ん？」

「……だから、だから！話を聞かないと分かんないんだってばああ！
デイベイイイン
バスタアアアア！！」『デイベインバスター』

そんな声が聞こえるとなのはから桜色の集束砲撃が打ち出されオメガXを飲み込んだ。

「やった…の？」

しかし

「たかがこの程度で勝ち誇った気になるな。」

そこには無傷のオメガXが佇んでいた。

「そ、そんな……」

「そろそろ決着をつけさせて貰おう。
ガルルキャノン、カートリッジリロード」

『カートリッジリロード』

「コキュートスバスター！！」

そう言うとかルルキャノンから蒼色の集束砲撃が放たれ、なのははプロテクションを張るものの容易く破られコキュートスバスターに呑み込まれた

砲撃後に降り立ったオメガXはすぐに蒐集を済ませ、

「せめてもの情けだ。今樂にしてやろう」

「ま…まだ……」

体もデバイスもボロボロなのはに対してオメガXはグレイソードを振り落とした

…がしかし、

…キンッ”と甲高い音がしたかと思うと目の前には

「なのは、遅れてごめん」

「フ…フェイトちゃん…」

そこにはなのはの親友、フェイト・テストロッサが居た。

「貴方…を許さないっ！」

第10話 悪い事だとしてもやらなくちゃいけない時ってあるよね（後書き）

次回と、長くて次々回ぐらいまではファーストエンカウトのお話は続きます。

次回をお楽しみに。

ちなみに最近の執筆への活力は、

- ・アクセス数
- ・評価
- ・お気に入り回数
- ・いつかくるかもしれない感想
- ・やる気

でなりたってます。

第11話 何事もやりすぎは良くないよね？（前書き）

みなさまこんにちは、
多人です。

先ほどアクセス数を確認しに行きましたなんとPVが2万突破して
いました！！

皆様ありがとうございます！

今後とも宜しくお願いします。

第11話 何事もやりすぎは良くないよね？

「私は…私は貴方を許さない！」

「何を許さないというのだ？」

「貴方はなのはを傷つけた、だからっ！」

「だから戦いに割り込んできたと。」

…随分と無粋なことをしてくれたものだな。

だが我も騎士、故に無粋な輩である貴様の名も聞かせて貰おうか？」

「時空管理局

囑託魔導師フェイト・テストロッサ、

貴方を魔導師襲撃事件の容疑で拘束しました！」

「…管理局か。

ならば我も名乗らねばならぬな。

我は闇の書に仕えし終焉を喚ぶ者なり。

終焉を喚ぶ鐘 終焉の竜騎士 オメガX、

闇の書の為に貴様の魔力貰い受ける！」

「ハアッ！」オメガXが騎士名を名乗ると同時にフェイトが詰め寄り高速の斬撃を放つが

オメガXはそれを意図も容易く避けていた。「……！な、なんであ
たらないっ！？」

「それは貴様が遅いからだよ。
そして何より、太刀筋が甘い。」

それでもなおフェイトは斬撃を繰り出すが掠りもしない
そのさなか、オメガXはフェイトから一気に距離を置き

「…………そろそろ遊びは終わりにしよう。」

グレイソード、カートリッジリロード。」

『カートリッジリロード』

カートリッジをリロードし終わると一気にフェイトに詰め寄り

「貴様の甘さ、その身に受けよ

全てを無に帰せ
オールデリート！」

つつさの出来事にフェイトはバルディッシュでガードしたのだが

“パリンッ”

「えっ…」

バルディツシュはオールデリートに触れた途端に砕け散り、コアだけになってしまった。

「判断を誤ったな、フェイト・テストロッサ。」

そういった後に零距离でガルルキャノンを撃ち合った

「きゃああああ！」

フェイトを落としたオメガXは蒐集のために落下箇所に向かおうとした。だが…

「……これは…」

オメガXはバインドで拘束されていた。

「時空管理局

執務官クロノ・ハラオウン

魔導師襲撃事件の実行犯として貴様を拘束する」

「こんなもので我を拘束したつもりか…？」

そう言うとオメガXはチェーンバインドを解除する

「なっ……！バインドを解除したと！？」

「さて、今宵の蒐集はここまでとして我はかえるとしよう。

そして、管理局の犬よ

我を捜そうとしても無駄だぞ？

貴様等があんなものに頼っている内は我を捉えるなど到底無理な話だ。

では、また相まみえる時を楽しみにしているぞ。

……そうそう、前代のような“無駄死”などの事態を起こすなよ？
艦の爆発では蒐集がきんのでな……………」

そう言うのと、オメガXは空間へと溶けて居なくなった。

居なくなった後、クロノが虚空に向かい怒声を叫んだのは言うまでもない

side オメガX

いやあ、やりすぎちゃったかな？

なのはの時までは思ったより順調だったんだけど、フェイトからが……ね。

斬撃が割と早かったからオメガインフォースの力を使ってた時に変なスイッチ入っちゃって、オールデリートまで使ってしまった。

俺が居る時点で原作ではないのは知ってるけど、バルディッシュって本来は中破だったと思うけど、……今回のってコア以外破壊だから……ほぼ全壊？

ま、まあ壊したのは外装とそれを作り出す機能だけだしコアにもそれほど致命傷にならない範囲でダメージも与えたから大丈夫だろ。

……うん、そのはず……。

でも、クロノに対しての挑発はやりすぎたと思っている。後悔はしてないけどな！

だって原作でのクロノ君は確かに良い人なんだけど、やっぱりKYな所はイライラしたからちよっとスッキリした。

まあこれで管理局の注意も引けたし問題ないだろよ。

…つていう間に八神家に到着したから擬人化してと

「ただいま」

そう言うとなんかやたら嬉々としたヴィータがやってきて

「おう！やつと帰ってきたな！！」

「なんだ鉄槌の、随分と嬉しそうだが何があった？」

「だから俺はヴィータだ！てか、そんな事どうでもいいんだよ！！
今日の蒐集で一気に

4 / 6 ぐらいまでいったんだ！」

「……ほう。そんなにまでいったか。

ちなみに何を狩った？」

「それがよ、見たこともない赤黒い竜と青白い竜でやたら強くてよ
」

へえ！赤黒い竜と青白い竜か、そんなん原作に居たっけ？

まあ割とどうで……

あれ、赤黒い竜と青白い竜？

い、いやいやいやいやいや…気のせいかもしれないしとりあえず映像かなにかないか聞か。うん、そうしよう。

「その二頭の竜の映像などはないか？
今後の戦いの参考にしたいのでな」

「ああ、確か今日はシャルマル居たから、おいシャル」

「はいはい、何ですかあ？ヴィータちゃん」

「なんかこいつが今日の戦いの映像をみたいって言ってんだけどあるか？」

「ありますよ」

では、今から映しますね」

映像鑑賞中…

映像鑑賞終了

「手間をかけたな、湖の」

「いえいえ、これぐらいお安いご用ですよ」

えっと、映像を見る限りあれはどうみても
レッドアイズとブルーアイズだったし……

しかも、場所をよく見るとなんかすつつつごく見覚えのある場所だ
ったからまさかと思っけど

俺……………もしかして帰れなくなっただ？

第11話 何事もやりすぎは良くないよね？（後書き）

まあなんというか、ちょっとやりすぎた気がしなくもない。

あと主人公は伏線を回収しました。

どこに伏線があったかどうか分りづらかったかもしれませんが、番外編での最後のコマが伏線でした。

そういえばそろそろ主人公のステータスとか上げた方がいいですかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2545x/>

転生先は・・・。

2011年11月26日16時53分発行